

四季耕作図、久隅守景（1600 年代） 作

17 世紀の村人の四季折々の風習を生き生きと描いた、一對の屏風である。作者は画家・久隅守景（1620 年頃－1690 年頃）。久隅はもともと、15 世紀から 17 世紀にかけて隆盛を極めた狩野派の画家である。久隅は、江戸時代に最も活躍した狩野派の画家のひとりである狩野探幽（1602-1674）に師事したが、やがて退塾し、日本の農村生活を描いた独自の画風を確立した。

農耕や絹の生産など農村の生活を描いた絵は、中国から伝わった絵画のジャンルである。「鑑戒画」と呼ばれ、室町時代（1336-1573）に流行した。これらの絵画は、統治者に領民の日常生活を教え、その苦勞を思い起こさせるという目的もあった。絵を通して領民が懸命に働いていること、思いやりをもって接するべきことを知ることができた。また、武士階級の子供たちの教育にも使われたかもしれない。

久隅をはじめとする多くの日本画家は、中国の農村生活を模倣し、中国風の衣服や住居を身にまとった人々も描いている。しかし、この屏風が注目されるのは、中国ではなく、日本の風習を描いている点である。この屏風に描かれている風景、建物、衣服、風習は、17 世紀の日本人の生活を表現している。

また、季節が左から右へと順に描かれているのもユニークな点である。日本の文字や絵巻物、屏風絵は、右から左へと進んでいくのが伝統的なスタイルである。この作品では、季節の順序を逆にして、左から春、そして右に冬へと続いている。

屏風はそれぞれ 6 面ある。最初の 2 面の春の絵では、雪が梢や屋根を覆っている。次の数面では雪が消え、橋を渡る人、川で釣りをする人、畑で働く人が描かれている。5 面目の人物は、夏の木の下でくつろいでいる。そして場面は秋へと移り、人々は畑仕事に精を出している。2 画面目の最後の面では、冬支度の喧騒が描かれている。子供たちが遊び、収穫期になると役人が年貢を取り立てる姿が見られる。